

第3回みえリニア戦略プラン（仮称）検討委員会議事 委員意見要旨

日時 令和8年2月4日（木）14：00～15：30

場所 三重県庁 講堂

- ・リニアの開通によって、東京や大阪から直接人が訪れるようになれば、三重県にとって非常に大きなインパクト。その中で、人の流れや県民の意識も大きく変化していくことが想定され、そうした変化を見据えてこのプランがつくられている。
- ・プランを進めるにあたっては、まず県民にリニア駅の設置によってどのようなメリットがあり、三重県がどのように変わるのかをしっかりと知っていただくことが重要。南部、北部それぞれのメリットを明確にして、県民に周知し、幅広い賛同を得ながら進めていくことが重要。
- ・三重県は日本のほぼ中央に位置し、高速道路網も新名神をはじめ日本の要衝。ここが途絶えると日本の物流が止まるほど重要な地域。鉄道についてはまだ十分に利便性が高いとは言えず、リニアの開通によって、日本の中心を通る新たな交通網が形成され、鉄道の利便性も向上することを期待。これを機に、道路網と鉄道網をうまく連携させ、三重県が日本全体にどれだけ貢献できるかが重要。
- ・今後、日本、世界全体が大きく変化し、AIの進展や自動運転技術の発展、さらには人が乗れるUAV（無人航空機）など、新しい時代に向けた先進的な取組を三重県が積極的に検討し、それが三重県や日本全体の発展につながるような方向性を打ち出していきたい。
- ・三重県には空港がないが、UAV専用の空港であれば広大な用地は必要ないかもしれず、そうした新しいインフラを先駆けて整備し、発信していくことも一つの方向性。また、高速道路網が発達している強みを活かし、自動運転技術の全国展開も可能。
- ・少子高齢化が進む中で、自動化を含めた新たな方針が今後ますます重要になってくるため、開業後ではなく、開業までの間に様々な取組を進めていただきたい。こうした取組が進むことで、開業後には駅周辺に本社機能の移転や、場合によっては省庁の誘致など、三重県の将来に大きな展望が開ける可能性もある。
- ・「若者の進学先」について、進学先の選択肢が広がることは非常にいいこと。三重県に住みながら首都圏の大学に通えるようになるのは、若者にとって大きなメリット。現状は選択肢が少なく、大学の収容力が低く、8割の学生が県外に進学しており、そのうち約1割が首都圏の大学に進学。リニアが開通すれば、三重県に住みながら東京の大学に通うことも可能となり、若者のライフスタイルや選択肢が大きく広がる。逆に、東京に住みながら三重県の大学に通うことも可能。三重県の最大の課題は人口流出。リニアを活用して、県外に進学する若者が三重県に住み続けられる仕組みを作ることが重要。
- ・「三重県が47位」という、外国人旅行者数（延べ宿泊者数）の2019年に対する2024年の伸び率が全国で最も小さいというデータであるが、理由の一つは、海外から三重県に来る際にセントレア（中部

国際空港) 経由が多いこと。多くの外国人旅行者は、羽田や成田、関西国際空港を利用するため、リニアが開通すれば、羽田や成田から三重県へ直接アクセスでき、インバウンド観光の大きなチャンス。これまでセントレアの便数や規模の制約で課題があった三重県にとって、外国人観光客を呼び込む新たな流れが生まれることから、インバウンド誘致に生かしていくことが重要。

- ・三重県における二次交通の課題について、リニアの駅ができて、そこから各観光地や目的地へのアクセス手段が十分でなければ、効果が限定的。現在、バスの減便や廃止が進み、人手不足やコストの問題も深刻。将来的には無人の新交通システムなどの導入も考えられるが、リニア駅からのアクセスをどう確保し、三重県全体に波及効果をもたらすかは、県民全体で考えていくべき重要なテーマ。
- ・三重県の観光 DX とブランド力の向上について、多様な資源を「点」ではなく、「面」としてつなぎ、周遊を促進していくことが重要。単に利便性を高めるだけでなく、三重県らしさを体験としてしっかり伝えていくブランド力向上が大切。観光データの活用やデジタルチケット、キャッシュレス決済、観光 MaaS、多言語対応などに加え、三重県ならではの価値をデジタルで可視化し、わかりやすい情報発信を進めていくとよい。名古屋市が導入を進めている SRT は単なる移動手段ではなく、都市部の回遊性向上やにぎわい創出を目的とした新しい交通システムで、このような新たなモビリティと観光まちづくりを連携させる仕組みも、三重県にとって重要。
- ・データの利活用の重要性について、今後は観光客の感覚的な部分だけでなく、来訪者の人流や交通利用、観光地の混雑状況、消費動向、満足度などのデータを横断的に収集・共有し、可視化していく取組が必要。観光地のデータが十分に収集・共有されていないことが課題であり、こうしたデータの利活用にも積極的に取り組んでいただきたい。
- ・デジタル技術による社会課題の解決について、賑わいや混雑、オーバーツーリズムに対しても、AI カメラやモバイルデータなどを活用した人流分析が重要。観光 DX やデータ・デジタルの活用を通じて、三重県のブランド力をさらに高めていくことを期待。
- ・今回の戦略プランは、中間報告での取組に加えて新たな取組がいくつか位置付けられ、最新の動向を反映したものや、めざす三重の姿の実現を強化できる取組である。また、3つの戦略を支える基盤づくりを(1)リニア三重県駅を核とした交通ネットワークの形成と、(2)リニア三重県駅を核としたまちづくりの2本柱として充実させ、そこに位置付けられた各取組や効果的かつ具体的で、リニア開通後の三重県の姿を魅力的なものとして映し出すことに成功している。リニア駅には三重県らしい空間デザインが取り入れられ、駅並びにその周辺は大いに賑わい、三重県並びに周辺地域へのゲートウェイとして機能し、多くの国内外の人たちが様々な交通手段で便利に移動している姿が目に見えよう。
- ・各取組のロードマップ等、取組主体も示され、誰がいつまでに何を着手しなければならないかが明確化され、本戦略の実効性を高めることにつながる。ただし、大阪までの全線開業時期や三重県駅の位置が見通せないことから、ロードマップは柔軟に設定できるようにし、それぞれが確定した段階ですぐに見直し、実効性の高い戦略にすることが望まれる。特に駅位置については、戦略を支える基盤整備の内容に大きく関わることから、駅位置に関連する各種の条件下において取組を整理しておき、駅

位置確定と同時に見直せるように準備しておく必要もある。

- ・四日市市においては、リニア時代を見据えた中心市街地の再編が、目に見える形で進み、特に、中央通りの新たなシンボルとなる円形デッキが昨年12月に完成した。今後整備を予定している「バスタ四日市」は、リニア開業に伴い生み出されるスーパーメガリージョンの活力や経済効果を本市に最大限引き込むための、極めて重要な基盤となり、さらに、新図書館の整備やJR四日市駅前での大学設置計画も進めている。これらは都市の求心力を高める上で重要な役割を果たすものと考えており、三重県全体の活性化に貢献できるよう、今後もハード・ソフトの両面からまちづくりを進めていく。
- ・熊野市では、豊かな自然や世界遺産である熊野古道、日本最古の花の窟神社を核とした歴史文化を生かした観光集客に力を入れ、また新たに農業を中心とした大型の体験交流拠点施設「熊野アグリパーク」の整備も進めており、滞在型の観光交流を推進。こうした取組を踏まえ、リニア開業の効果が三重県南部地域、さらには紀伊半島南部地域にまで広く波及することを大いに期待。そのためには、戦略を支える基盤づくりにも示すとおり、リニア駅からの交通アクセスの確保と利便性の向上が極めて重要。現在進められている紀伊半島を1周する高速道路の早期開通や4車線化、鉄道・バスなどの利便性向上も必要不可欠。二次交通については、地元自治体としてもしっかりと取り組む。

以上